

学修時間・学修行動調査（平成 28 年度前期） 分析結果

学習支援センター IR 推進室

平成 29 年 2 月 8 日

本資料は、平成 28 年 9 月 14 日から 9 月 29 日にかけて、学習支援センターIR 推進室が実施した「学修時間・学修行動調査（平成 28 年度前期）」の回答内容を分析したものである。本調査は、平成 25 年度前期より、各期の終了後に 4 学部の 1～3 年生から学生を抽出して実施しており、今回は、経営学部、社会学部、ソフトウェア情報学部、薬学部の 4 学部の 1～3 年生から回答を得た。調査の回答数を表 1 にまとめる。回答総数は、231 名であった。過去の回答数は、平成 25 年度が 176 名（前期）と 201 名（後期）、平成 26 年度が 332 名（前期）と 265 名（後期）、平成 27 年度が 299 名（前期）と 151 名（後期）となっている。なお、平成 25 年度後期は経営学部が、平成 27 年度後期は社会学部が調査に参加できていない。平成 27 年度前期調査と比較すると、経営・ソフトウェア情報・薬の 3 学部が微減し、社会学部が純増となっている。

表 1 学部・学年別回答学生数

	経営学部	社会学部	ソフトウェア 情報学部	薬学部	学年計
1 年生	15 名	40 名	17 名	13 名	85 名
2 年生	11 名	31 名	33 名	12 名	87 名
3 年生	10 名	23 名	12 名	14 名	59 名
学部計	36 名	94 名	62 名	39 名	231 名

調査の内容は、平成 27 年度後期の授業時間中の学修時間・行動に関する設問（9 問）、授業時間外の学修時間・行動に関するもの（4 問）及び能力・行動の変化に関するもの（9 問）の合計 22 問である。これらは、平成 25 年度（前期・後期）以降の調査とほぼ同じである。一部無回答の欄もあったものの、ほとんどの学生がすべての質問に回答した。

質問から抜き出した 10 項目に関する分析結果を、以下に示す。

（授業時間中の学修）

（1）受講した科目数（集中講義を除く）

まず、平成 28 年度前期に受講した科目数（集中講義を除く）を調べた（表 2、表 3）。

最大値と最小値に大きな差があるのは、これまでの調査と同じ傾向である。また、経営学部 3 年生と薬学部 3 年生の最小値が極端に小さいが、前期と後期の受講数に差があることを考慮しても実態に合っていない。本調査は無記名で実施しているため回答者は特定できないため、回答の通りに示す。

学年別の集計においては、従来同様、受講科目数は 1 年生がもっとも多く、学年進行にともなって減少する傾向が見られた。学部ごとの平均値と標準偏差は、前年度前期と比べ、経営学部と社会学部では

平均値はほぼ変わらず、標準偏差が経営学部では 1.05、社会学部では 0.39 増えている。ソフトウェア情報学部と薬学部では、前年度前期と比べ、標準偏差はほぼ変わらないが、平均値がソフトウェア情報学部で 2.30、薬学部で 2.52 減っている。これら 2 学部では、最小値が大きく減っているのが目立つ。

表 2 受講科目数(学年別、集中講義以外)

学年	平均	最大	最小	標準偏差
1 年生	14.25	20	6	2.05
2 年生	12.26	21	4	3.57
3 年生	9.36	16	0	3.36

表 3 受講科目数(学部別、集中講義以外)

学部	平均	最大	最小	標準偏差
経営学部	12.82	18	0	4.38
社会学部	12.63	21	5	3.59
ソフトウェア 情報学部	11.56	18	4	3.40
薬学部	11.82	20	1	2.91

(2) 受講した集中講義の科目数

参考のため、集中講義の受講数についても調査した(表 4)。全学部・学年においては最大で 5 科目の履修者が居た。また、薬学部のとくに 1 年生と 3 年生の受講数が他の学部・学年よりも多いのは、これまで同様である。

表 4 学部・学年別の集中講義科目受講数

学部	学年	平均	最大	最小	標準偏差
経営学部	1 年生	1.50	3	0	1.00
	2 年生	0.50	2	0	0.71
	3 年生	0.20	2	0	0.63
社会学部	1 年生	0.30	4	0	0.78
	2 年生	0.37	3	0	0.74
	3 年生	0.53	3	0	0.84
ソフトウェア 情報学部	1 年生	0.21	3	0	0.80
	2 年生	0.20	2	0	0.55
	3 年生	0.09	1	0	0.30
薬学部	1 年生	2.08	5	0	2.11
	2 年生	1.18	2	0	0.75
	3 年生	2.00	5	1	0.96

(3) 授業中、最初から最後まで集中できた授業の割合

全体の授業のうちで最初から最後まで集中できた授業の割合を、学年別と学部別にまとめた（図 1、図 2）。学年別では、学年が上がるにつれ、集中できた授業が 25%未満の割合が増え、逆に 75%以上割合は減る傾向が見られた。過去の調査では、集中できた授業が 75%以上の割合は 2 年生が最小のことがほとんど（平成 27 年度前期以外）であり、今回の結果は平成 27 年度前期と近い。

学部別では、75%以上集中できた割合はどの学部でも 20%弱であった。一方で、25%未満しか集中できなかった割合は経営学部が 30%弱と多く、他の 3 学部は 10%台前半となった。30%に近い結果が見られたのは今回が初めてである。また、半数以上の授業で集中できた割合が薬学部で 80%を超えており、こうした高い結果が見られたのも今回が初めてである。これらの傾向が今後も続くかどうか次回以降の調査でも注目し、場合によっては対応や他学部への波及方法を検討したい。

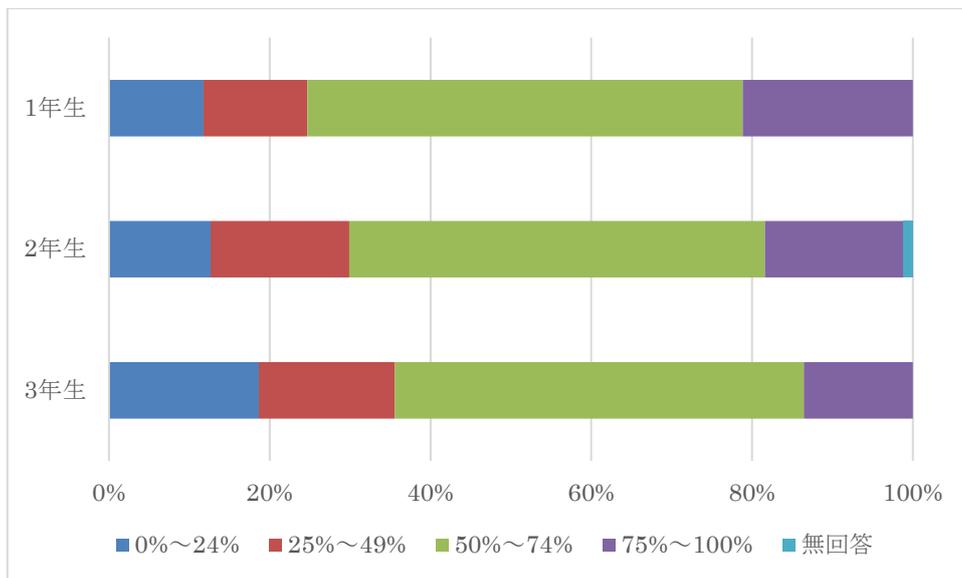


図 1 集中できた授業の割合 (学年別)

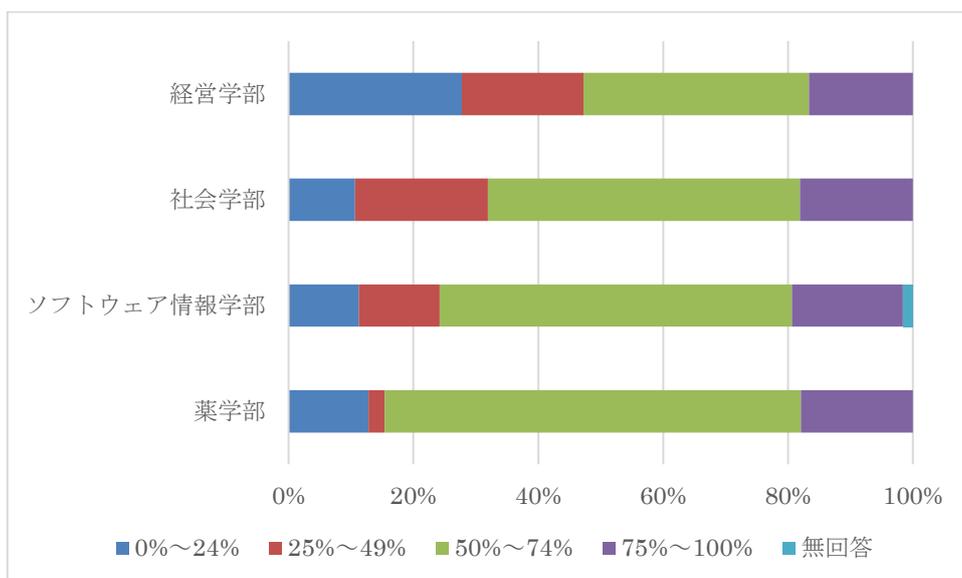


図 2 集中できた授業の割合 (学部別)

さらに、集中できた理由を自由記述形式で尋ねた。

- a) 自分にとって興味のある・面白いと思える内容を扱っている (91 件)
- b) 教員の指導方法が上手である (27 件)
- c) 気分・体調、周りの環境 (26 件)
- d) 付いていけないなどの危機感 (19 件)
- e) 自分の将来にとって、有用だと判断した (資格取得など) (15 件)
- f) 自分が頑張った (自発性発揮など) (12 件)
- g) 自分で問題を解いたり、グループワークをする必要があった (9 件)
- h) 教員の姿勢 (熱意、まじめ、優しいなど) (7 件)
- i) 内容が理解できて、自信が付いた (6 件)
- j) 板書が多く、ノート作りをきちんとしなくてはならない (5 件)
- k) その他 (6 件)

回答の傾向は、概ねこれまでの調査と同じであった。a) は突出して多い理由で、学生の興味や関心に合った内容を扱うことが、集中力の向上につながっている。次いで、教員の指導方法の上手さをあげている。気分や体調、周りの環境を理由にあげた件数が多いのは、これまでの調査と異なる。外的要因としては、授業の内容、教員の指導スキルや姿勢、ノート作成、環境が、内的要因には、気分や体調、危機感、有用との判断、主体性、活動の必要性、理解・自信が、それぞれあげられる。

逆に、「90 分間の間、集中し続けるのは無理」など等、集中が途切れる要因に対する回答も、これまでと同じく見られた。

(4) 授業中の教員への質問回数

授業中 (実習・実験以外) の教員への質問回数を学年別にまとめたものが、図 3 である。学年に関わらず、まったく質問をしない学生が全学年で 4 割弱見られる。この割合は、これまでの調査とほぼ変わらない。また、10 回以上質問したと回答した学生の割合が、学年が上がるごとに増えているのは、前回調査から見られる傾向である。前回から学年が進行しているにも関わらず同様の傾向が見られたのは、在学期間が長くなるにつれて (特定の) 教員との関係が着実に構築されていることが反映されていると考えられるが、今後の調査でもこの傾向が続くか注視したい。

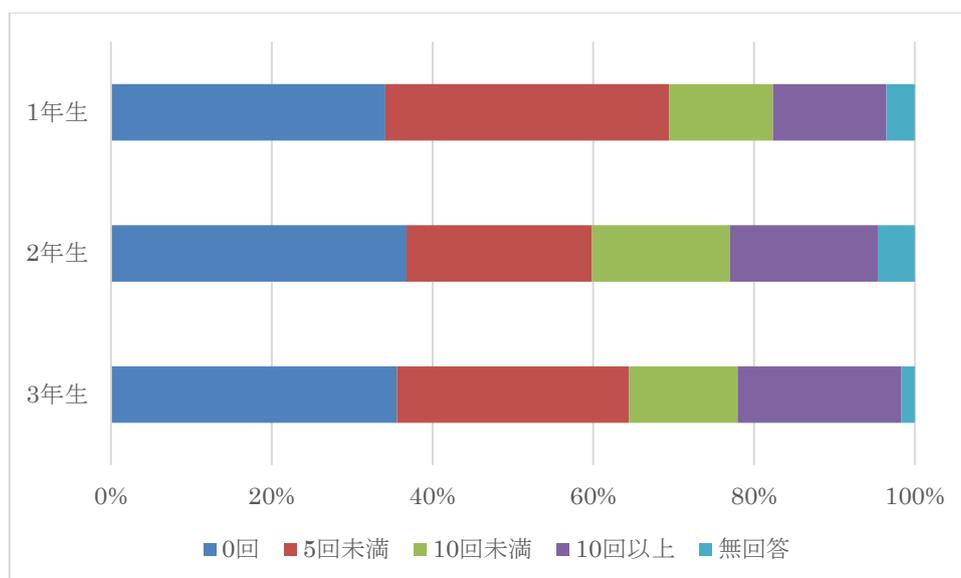


図3 授業中の教員への質問回数(学年別)

(5) グループ活動の回数

授業中のグループ活動の総数を、図4と図5にまとめた。学年別では、30回以上のグループ活動を行ったと回答した割合は1年生が16.0%で、2年生で9.4%となり、3年生ではほぼ見られない。これらよりも少ない活動回数に関しては、1年生がもっとも多く、学年進行にしたがって割合が下がる傾向がある。前回の調査では、15回以上活動を行った割合は学年に関わらず2割程度であったが、今回は3年生で落ち込んだものの、1年生と2年生では4割程度まで戻っている。ただし、5回以上活動を行った割合は、どの学年も前回調査とほぼ変わらない。考えられる原因は、前回調査では比較的回数が多い社会学部の学生が回答していないことや、グループ活動を重点的に行っている基礎スタンダード科目群のオムニバス科目でのグループ活動の回数が増えた可能性の二つである。

学部別では、社会学部とソフトウェア情報学部が全体的に多めで、経営学部も続いている。薬学部は多くの30回以上と回答した学生が7.7%居るものの0回の学生も30.8%居るといふ、学生ごとの差異が大きい。これまでの調査と比べると、社会学部とソフトウェア情報学部ではあまり違いはなかったが、経営学部は若干活動回数が増えている。また薬学部では、0回と回答した割合が、4割半ば(平成26年度後期調査)、4割(平成27年度前期調査)、2割強(平成27年度後期調査)と前回調査まではグループ活動が総体的に増加していたのに対して、今回は減少に転じている。

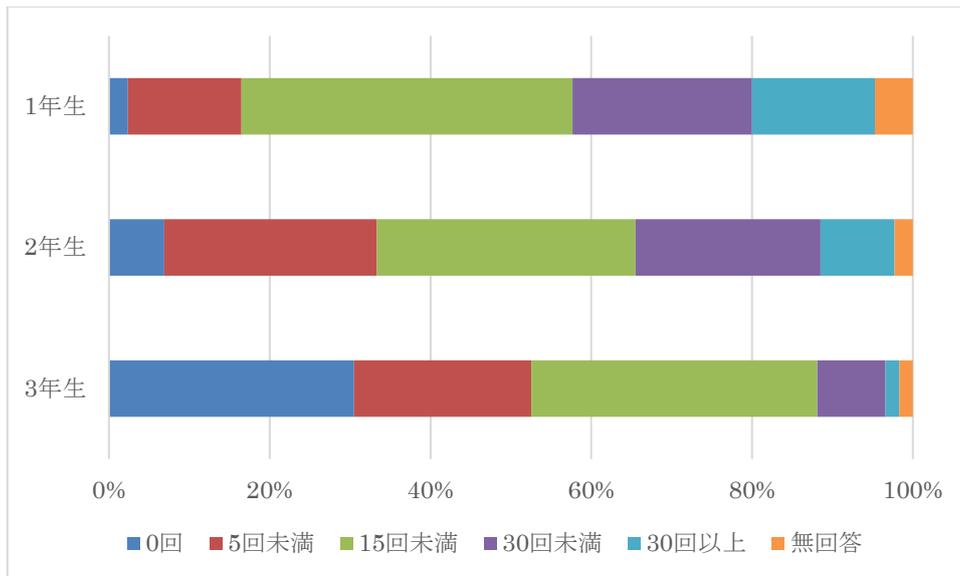


図4 グループ活動の回数(学年別)

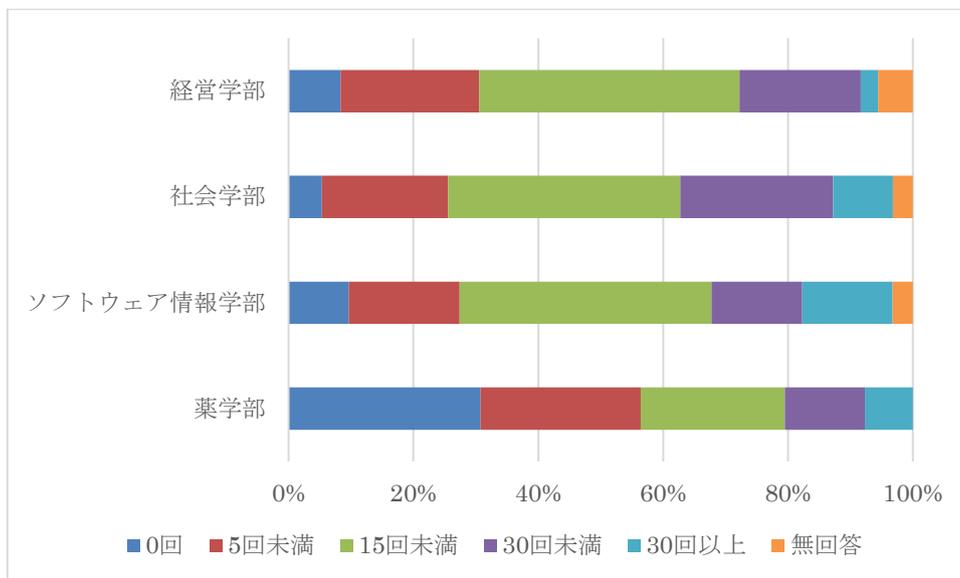


図5 グループ活動の回数(学部別)

(6) 発表の回数

(5)と関連して、授業中に行った発表の総数を、図6と図7にまとめた。学年別では、1回以上行った割合は学年が進むにつれ、2割程度ずつ減少している。このため、回数が0回の学生は、1年生はほぼおらず、2年生で20.9%、3年生では43.1%になっている。これまでの調査でも、学年が上がるにつれて回数が減少する傾向は見られたが、3年生が4割以上にもなったのは今回が初めてである。ちなみに、過去の調査でもっとも多かったのが平成27年度前期調査の27.9%であった。一方で、3年生で5回以上発表を行った割合も増加しており、二極化が進んでいる。

学部別では、薬以外の3学部がほぼ同じ傾向を示しているのに対して、薬学部の発表回数が少ない傾向が見られる。この傾向は前回調査を除いてこれまでの見られたものであり、前回調査のみ薬学部とその他の学部の差が少なかった。このことが(5)の3年生の回数減少に影響しているものと思われる。

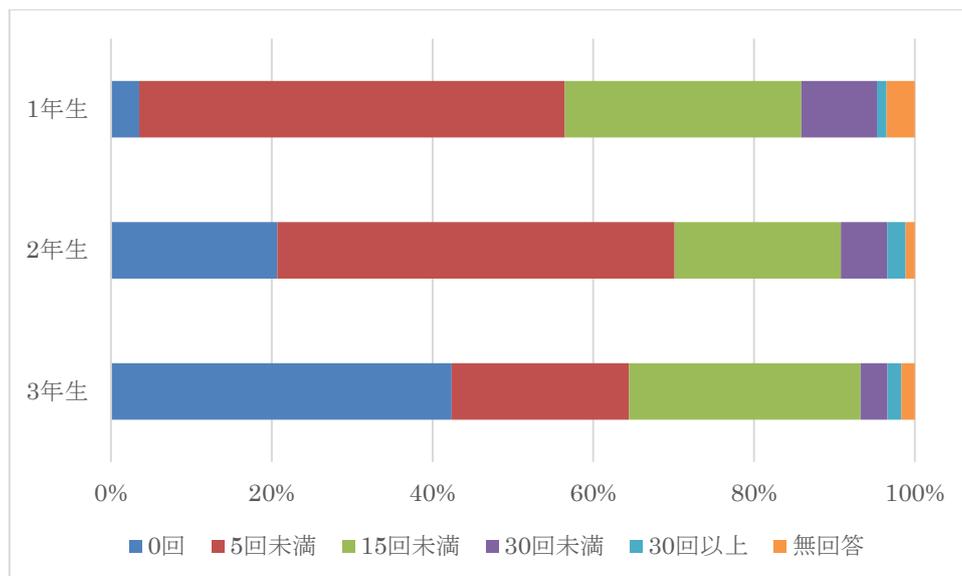


図6 発表の回数(学年別)

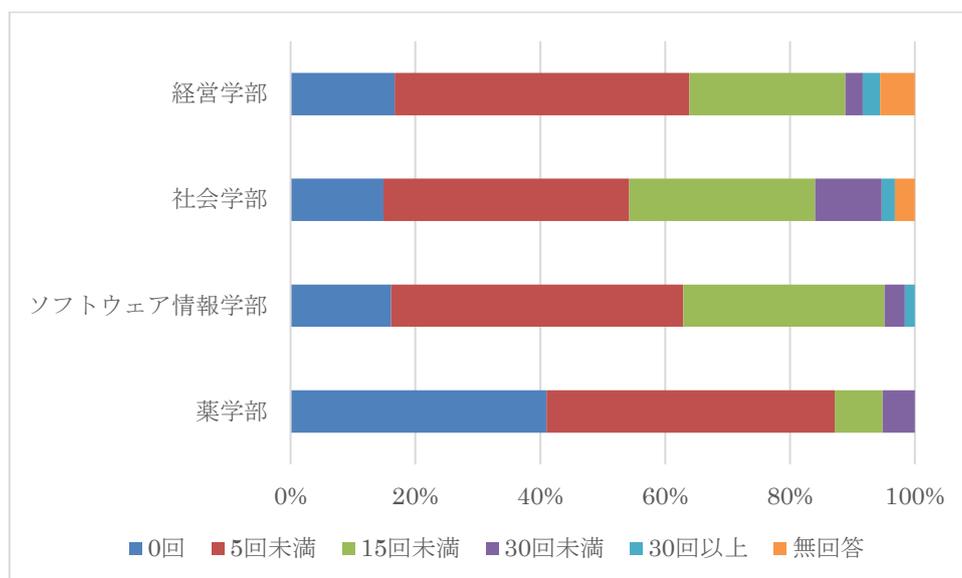


図7 発表の回数(学部別)

(授業時間外の学修)

(7) 授業時間外の学修行動の内容

授業時間外に行っている学修行動を、選択肢から複数選択する形式で回答させた。学部・学年ごとの結果を表5に示す。宿題やレポート作成等、教員の指示による行動は、経営学部1・3年生(宿題)やソフトウェア情報学部1年(レポート作成)が低いことを除けば、どの学部・学年でもほぼ7割以上の学生が行っている。一方で、学生が能動的に行う予習・復習・主体的調査は、薬学部とソフトウェア情報学部の1・3年生で比較的高い割合を示しているが、他は総じて低めである。とくに予習に関して、経営学部1年生の0%と薬学部2年生の8.3%が目立つ。これまでも薬学部では2年生の割合が低めの傾向があったが、これほどまでに低い数値が示されたのは、今回が初めてである。

表 5 学修行動の内容

学部	学年	宿題	レポート 作成	予習	復習	主体的 調査	その他
経営学部	1年生	53.3%	73.3%	0.0%	26.7%	13.3%	0.0%
	2年生	81.8%	81.8%	18.2%	27.3%	9.1%	18.2%
	3年生	50.0%	70.0%	30.0%	40.0%	50.0%	0.0%
社会学部	1年生	75.0%	80.0%	32.5%	45.0%	22.5%	2.5%
	2年生	80.6%	80.6%	16.1%	51.6%	16.1%	3.2%
	3年生	60.9%	91.3%	21.7%	26.1%	34.8%	4.3%
ソフトウェア 情報学部	1年生	88.2%	64.7%	47.1%	70.6%	17.6%	0.0%
	2年生	75.8%	93.9%	27.3%	60.6%	30.3%	3.0%
	3年生	100.0%	83.3%	41.7%	75.0%	33.3%	8.3%
薬学部	1年生	92.3%	69.2%	61.5%	92.3%	53.8%	0.0%
	2年生	100.0%	83.3%	8.3%	66.7%	41.7%	0.0%
	3年生	78.6%	92.9%	42.9%	78.6%	50.0%	7.1%

(8) 授業時間外の学修時間（最大、平均）

授業時間外の学修時間を、週単位で尋ねた。調査では、週ごとの最大値と平均値、大学内と大学外のどちらでどれだけ行ったかを回答させた。それぞれを学年別にまとめたものを、図 8～11 に示す。

まず最大値では、大学外での学修時間の方が多く、試験前などの特定の時期に集中して学修を行っている様子が見られる。5 時間以上学修を行っている割合は、学内／学外とも 2 年生が少なく、逆に、「無し」と回答した割合は、学内では 2 年生がもっとも少なく、学外では学年間の差はあまり見られない。前回までの調査と比較すると、学内では「無し」と回答した割合はどの学年も 2 割前後で推移していることと 5 時間以上と回答した割合は 3 年生がもっとも多い共通点がある。また、学外では 5 時間以上と回答した割合はあまり変化がなく「無し」または 2 時間未満の割合において調査ごとに数ポイント程度の増減が見られる。

平均値に関しては、最大値と同様、大学外での学修時間が多い。5 時間以上と回答した割合は、学内／学外とも 3 年生ももっとも多い。また、「無し」の割合は学内／学外とも数ポイントの増加はあるものの最大値とあまり違いは見られない。最大値の方は「2 時間以上 5 時間未満」がどの学年でももっとも多く、平均値は「2 時間未満」が学年に関わらずもっとも多い。これまでの調査と比べると、学内ではどの学年でも「無し」と 2 時間未満を加えた割合が 6 割程度であることが共通している。学外についても同じ回答の割合がどの学年でも 5～6 割程度で推移している。

授業外学修の時間は全体的に学内／学外とも少な目であると考えており、授業外学修を行える部屋を増やすことなど、シラバスに明記している授業外学修の内容を集約して学修を行うハード・ソフト両面の環境を整えるなどの対応を検討すべきであろう。

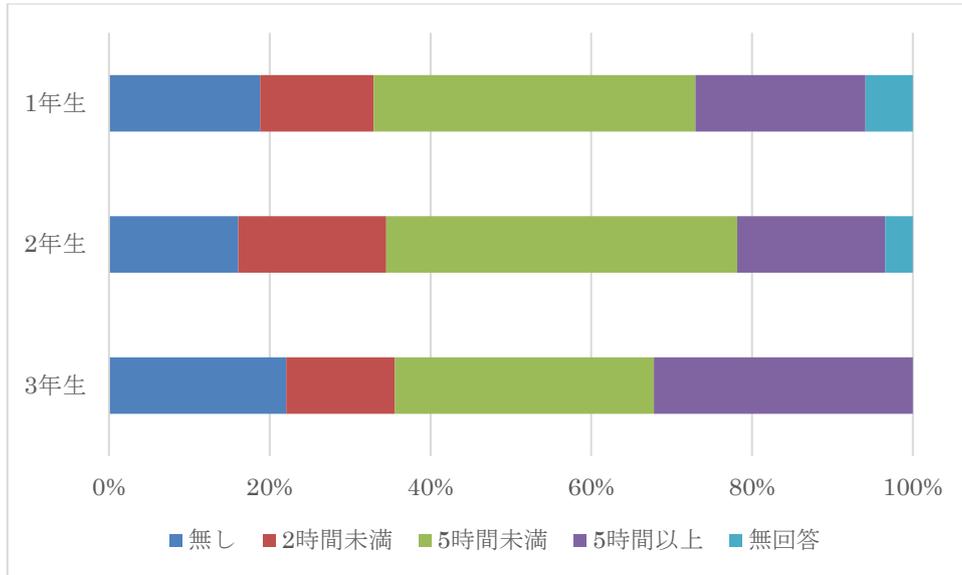


図8 授業外の最大学修時間（大学内、学年別）

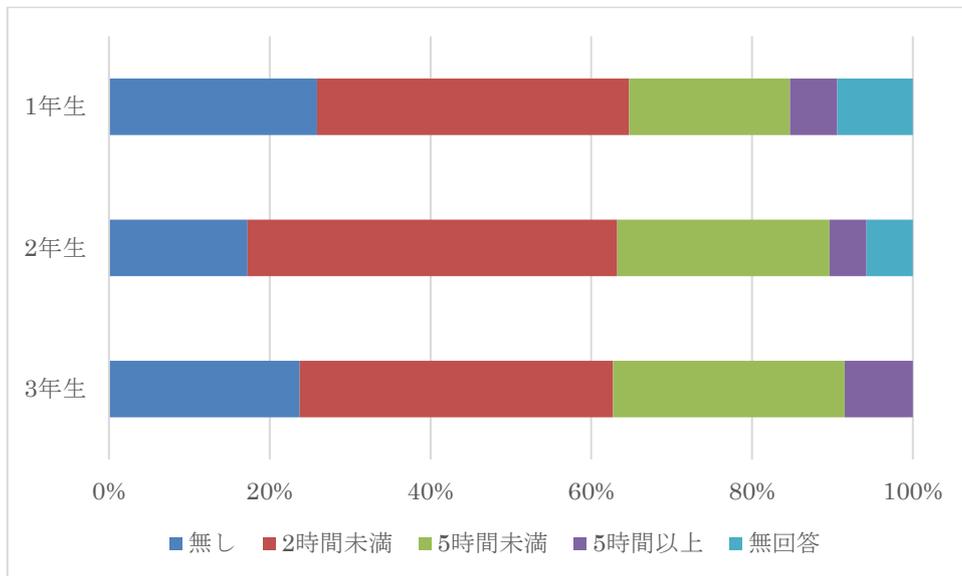


図9 授業外の平均学修時間（大学内、学年別）

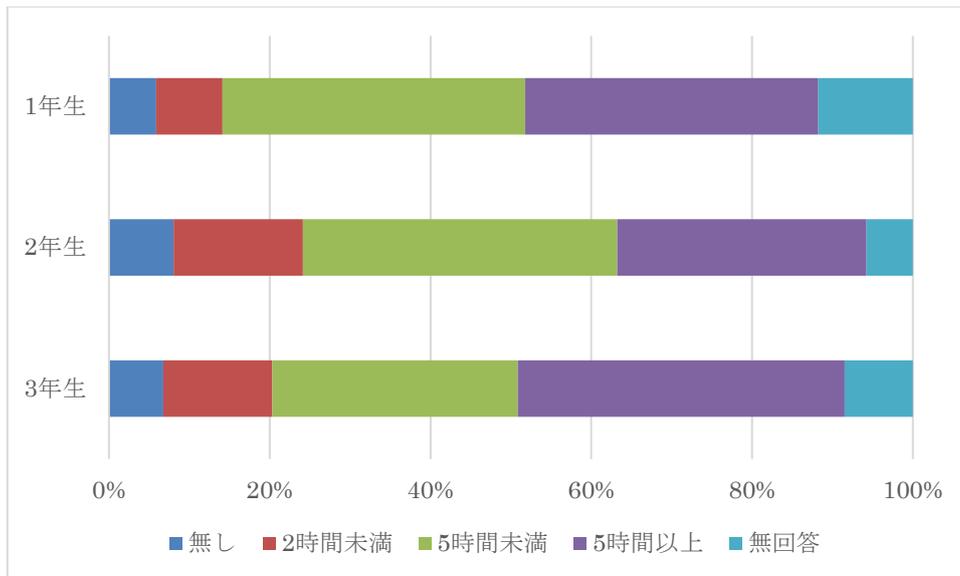


図 10 授業外の最大学修時間 (大学外、学年別)

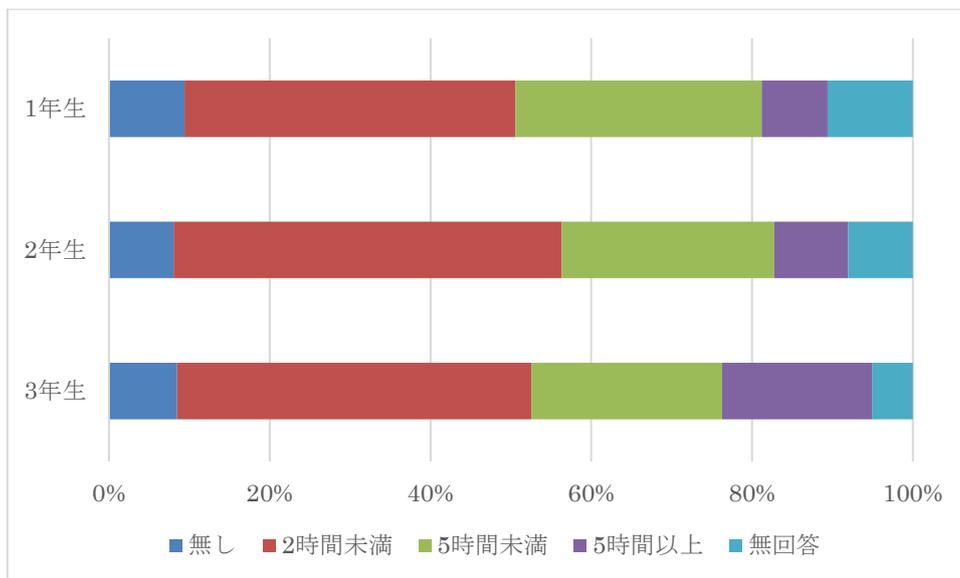


図 11 授業外の平均学修時間 (大学外、学年別)

(能力・行動の変化)

(9) 教員の部屋の訪問回数

学生がとくに授業外で行動する度合いを調べるために、授業時間外に教員の居室を訪ねる回数を調べた(図 12)。多くの学生は、呼出し等に応じるために、数回は訪れる必要があると考えられるが、一度も訪問しない学生がどの学年でも一定の割合で居るが、1年生は1割程度で2年生と3年生では2割程度であった。この結果は、前回を除いた調査とほぼ同じである。なお、前回の調査には社会学部が参加しておらず、3年生の割合は変わらないものの、「訪問無し」の割合は1年生で4割以上、2年生で3割に上っていた。これらのことから、社会学部の1,2年生が他の学部よりも教員の居室を訪れると考えられる。

学生が教員に相談しやすい環境を整備することは、今後も継続して取り組む課題と考える。

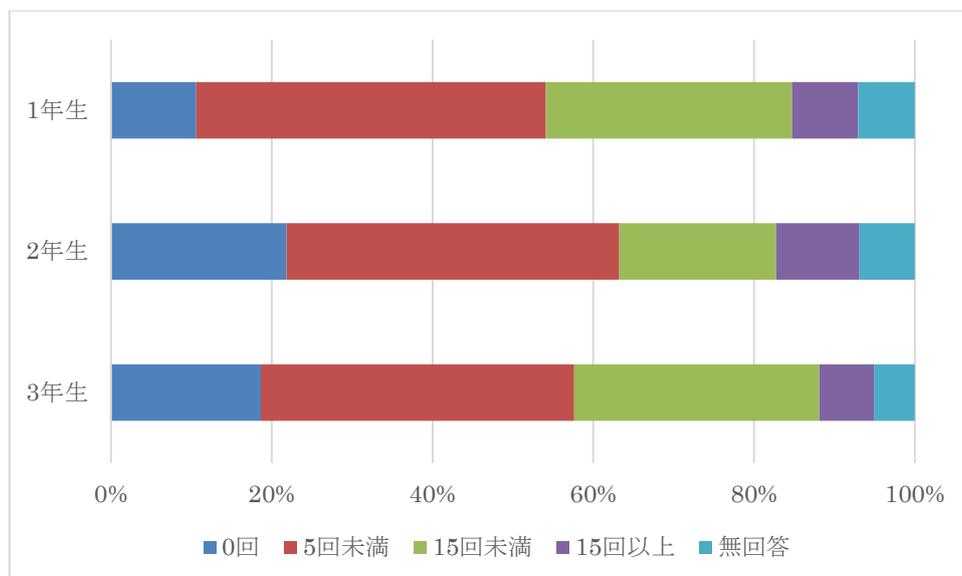


図 12 学年別の訪問回数

(10) 授業時間外での学内友人・知人との共同学習

授業時間外の学習を学内の友人・知人と共同で行う頻度を、三つの選択肢から選ぶ形式で尋ねた(図 13、図 14)。学年別では、「まったく無かった」と回答した割合がどの学年でも 2 割程度であり、前回調査(社会学部不参加)を除けばこれまでの調査と変わらない。一方、「良くあった」という回答は、これも前々回調査とほぼ同じで、全学年で 2 割以上見られた。中でも、1 年前の調査では 1 年生の割合が低く、今回は 2 年生の割合が低いことから、本学での働きかけよりも、属人的な影響があるものと思われる。

学部別では、薬学部において共同学習が行われている傾向が高く、他の 3 学部は明らかに異なる。また、薬学部以外では、経営学部が「良くあった」と「まったく無かった」の割合がどちらも高めであった。各学部についてこれまでの調査と比較すると、経営学部では「良くあった」が減り「まったく無かった」が増える傾向があったが今回は「良くあった」が 20 ポイント程度急増した。社会学部では特段の変化は見られない。ソフトウェア情報学部では、「まったく無かった」が増加傾向にあり、「良くあった」も経営学部ほどではないが微増している。最後に薬学部では、「まったく無かった」の割合はずっと変化していないが、「良くあった」の割合は 3 割から 5 割の間を揺れ動いている。

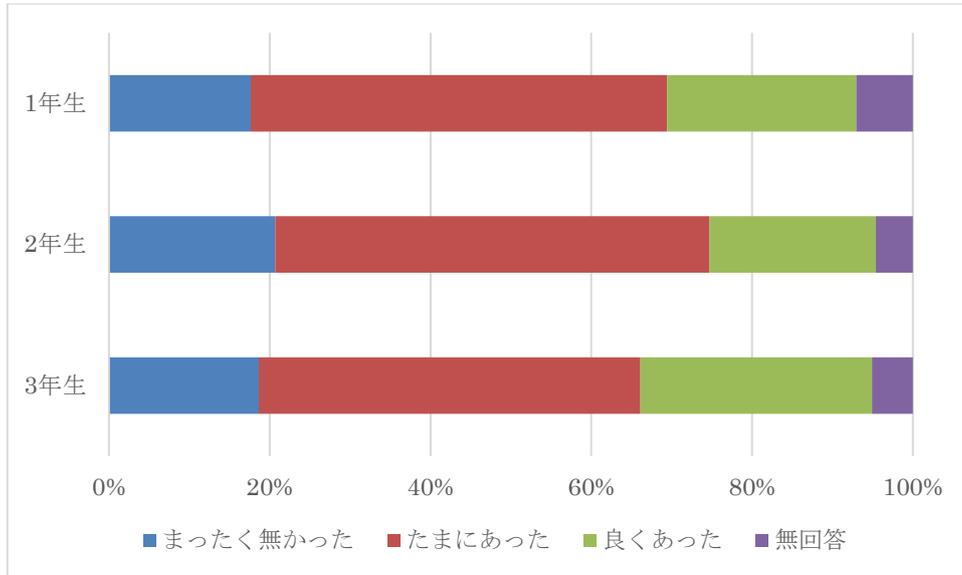


図 13 学年別の共同学習状況

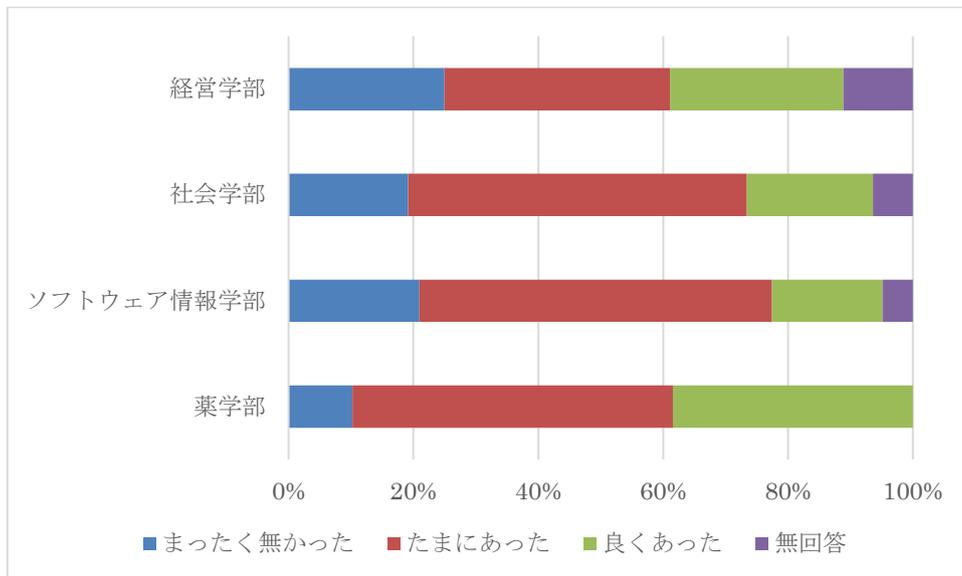


図 14 学部別の共同学習状況